

高等教育研究センター かわらばん

冬号
名古屋大学
高等教育研究センター
ニューズレター第29号

留学生受け入れ談義

「グローバル30」の不思議

「留学生30万人計画」をバックボーンとして文科省が鳴物入りで立ち上げた「グローバル30」プロジェクトには、興味深い特徴がみられます。それは、留学生から遠く離れた人々（自公前政権、財界、文部科学省など）が積極的であったのに対し、留学生と日常的に接している人々（指導教員、留学生相談員、事務担当者など）に慎重論が多いことです。

大学執行部はこの両者の間に立って苦心しています。大学の長期的戦略を考えれば、予算獲得増や留学生受け入れのインフラ整備などにとって「グローバル30」は起爆剤となる可能性を秘めています。その反面、大学教育の現場には留学生30万人計画そのものを非現実的であるとす意見が多いのも事実です。

指導教員への支援不足

ではなぜ、日本の大学教育の現場には慎重論が根強いのでし

ようか。もちろん要因は複合的

です。（研究大学ではとりわけ）厳格な学部入試と選抜性がゆるくなりがちな大学院入試のダブルスタンダード、留学生の日本語能力の問題、学生募集や事務体制上の未整備、卒業後の就職支援の手薄さなど、挙げればきりがないのです。それらの中で何が最大のボトルネックかと問われれば、私は指導教員へのサポート不足を第一に挙げます。

これまで日本の大学では、留学生への教育・研究指導を行う教員へのサポートや情報提供がほとんど行われてきませんでした。留学生を受け入れた経験のない教員や教育経験の浅い若手教員にとって、留学生を受け入れることは心理的・時間的に大きな圧力となるにもかかわらず、受け入れ手続きから日常の指導、論文作成支援、進路の相談まで、多岐にわたる内容が指導教員に

ほぼ一任されてきたのです。その結果、留学生受け入れに

理解のある教員ほど苦しい状況に追い込まれ、これ以上の受け入れに対して懐疑的になるとい

う悪循環を生み出しました。国民の消費マインドが景気に大きな影響を及ぼすのと同様に、留学生の受け入れ当事者である大学教員のマインドが冷えている状況では、受け入れが順調に拡大するはずはないのです。

政府に振り回されないために

さる11月に行われた新政権の「グローバル30」については予算要求の縮減が言い渡されました。来年度の文教予算にはこの仕分け結果が少なからず反映されるでしょう。グローバル30の前提となっている「留学生30万人計画」は福田康夫内閣の時に提唱されたものですから、民主党を中心とする新政権が発足した以上、この計画に関する議論は宙に

浮いていると考えた方がよさそうです。

そこで提案です。どうせ予算を縮減されるなら、盛気楼のよ

うな数値目標を追いかけることよりも、留学生を受け入れるた

めの地道な改善運動に力を注い

ではどうでしょう。本学の各部

局に留学生相談室が設置された

ことは歓迎すべきですが、すべ

ての問題をそこに押しつけるな

らば相談室はすぐにパンクして

しまいます。問題が起きてから

対処するよりも、指導教員や研

究室のレベルで予防できれば問

題を深刻化させずにすむし、要

する労力も小さくてすみます。

たとえば、留学生受け入れの基

ポスター発表募集中!

大学教育改革フォーラム in 東海 2010

日時 2010年3月13日(土) 10:00~17:50

会場 名古屋大学ID電子情報館 (地下鉄名城線名古屋大学駅3番出口より徒歩1分)

主催 大学教育改革フォーラム in 東海 2010 実行委員会 FD・SDコンソーシアム名古屋

参加費無料 申込不要 となたでもご参加いただけます。

詳しくはウェブサイトにて。

URL: <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tf2010/>

POD2009年次大会に参加しました

10月28日(水)から11月1日(日)の5日間、米国テキサス州ヒューストンで、「高等教育専門職組織開発ネットワーク」(通称POD)の年次大会が開催されました。「FD・SDコンソーシアム名古屋」の事業の一環として、名古屋大学、中京大学、南山大学、名城大学の教職員計13名が今年も同大会に出席しました。



大会の主要トピックは「組織開発」「研究革新」「専門能力の開発」の三つです。個々のセッションのテーマは、IT技術の授業における活用方法や、学生が利用しやすいシラバスの作成の仕方、学習理論を活用した指導法、教員がパフォーマンスを向上するための方法など、実に多様でした。出席者は積極的な発言を求められる中で、他国の参加者と交流を行いました。630余名の参加者のうち日本からの参加は38名に上り、4大学の教職員同士だけでなく、日本の他地域からの参加者とFD・SDの取り組みについて情報交換を行う機会を持つこともできました。

詳細は3月に開催される「大学教育改革フォーラム in 東海」において紹介する予定です。

(久保田祐歌)

準についてよく話し合い、彼らが日常的にどのような問題を抱えており、教職員として彼らにどのようにアプローチすればよいのかというノウハウを部局内で蓄積し、教職員間で共有する

のです。個々の教員が「大学全体のサポートがしっかりとれているので、

もっと留学生を受け入れてもいい」と思えるような大学ならば、自然と留学生も増えて、国際化指標も高くなり、世界ランキングも上がるかもしれません。これ以上、政府の都合に振り回されるのは御免です。ならば自助努力しかないと考えます。

(近田政博)

かわらばんへの皆さまの「意見・ご感想を裏面のEメールアドレスまでお寄せください

韓国の大学事情

孫準鍾
(客員准教授／韓国教員大学)

高等教育研究センターに客員准教授として赴任して1ヶ月あまり。韓国と日本の大学事情には似通ったところが数多くあることが見えてきました。

たとえば、大学設置基準の大綱化とそれに連なる学生の増加、多様化が挙げられます。韓国では1995年に、日本における大綱化と同様の政策が実施されました。その後、大学の数も大

たため、大学教員の教育者としての役割も見直されています。

教授学習を支援する学内センターの設置が進められ、既に韓国の四年制大学の2分の1程度には当該センターがあります。

両国ともに、少子化の影響も出てきています。韓国の場合は受験生のソウル志向がひときわ強く、地方の大学では学生募集に時間と労力が注ぎ込まれていきます。それでも、受験生の人気

力向上のために世界水準の研究への支援を拡大しています。とくに韓国政府は、研究業績に基づいて大学の予算支援規模を決

定する方式を取り入れています。両国の大学では、予算の安定的確保に向けて教員の研究能力を重視せざるをえません。研究を

奨励するために、研究業績評価を昇進や再任用、給与などに反映させている大学もあります。一方で、韓国の大学ならではの

家レベルでは英語による講義が重視され、大学教育の現場においても広く実施されています。

しかし、日本政府も「グローバル30」などの政策で国際化を推進しているといことなので、

この点での両国間の違いは今後小さくなっていくかもしれません。また、韓国政府は先頃、国立大学の法人化を打ち出しました。韓国と日本の大学システムは、



Higher Education Glossary

—— 高等教育にまつわる用語集 ——

アカデミック・ライティング教育 Teaching Academic Writing

論文やレポートなどの学術的な文章を書くことをアカデミック・ライティングと呼びます。もともと日本で「アカデミック・ライティング」を冠する授業は、英語論文の書き方を教えるものでした。現在では、同じ「アカデミック・ライティング」という科目名ながら日本語論文の書き方を教える授業が開講されるようになっています。このなかには、留学生を対象にして日本語の論文作法、いわゆるアカデミック・ジャパニーズの習得をめざす授業もあります。他方、近年増加しているのが、初年次学生一般を対象とする授業です。アカデミック・ライティングはノート・テイキングやプレゼンテーションなどのスタディ・スキルズの一つとみなされ、このようなスキルを入学後の早い段階で習得させる必要性が広く大学関係者に認識されるようになったのです。

その背景には、アカデミック・ライティング教育の射程の広がりがあります。学術的な言葉遣いや文章の構成方法、引用の仕方、注や参考文献の書き方を教えるにとどまらず、思考力を育成することも課題となってきています。論文作成においては、当然のことながら思考力が求められます。とりわけ、仮説を立て、根拠に基づいた論拠を示し、結論を導くという論証の過程においては論理的に考えることが要求されます。他者の主張について妥当性を検討する際には複眼的に思考しなければなりません。思考力は大学において学習するにも社会に出て活躍するにも必要なものであり、その育成をアカデミック・ライティング教育は担いはじめたのです。

いっぽう2000年頃からは学生のライティングを授業外で支援する動きが広がっています。早稲田大学をはじめ、学内にライティングセンターを設置する大学が増え、名古屋大学附属図書館のラーニング・コモンズのようにライティングを含む学習サポート環境も整えられつつあります。授業課題の添削指導の内容によっては成績評価を左右しかねないといった問題もあり、アカデミック・ライティングに関わる授業外での支援と授業との連携のあり方は昨今の議論の対象となっています。(久保田祐歌)

読んでおきたい この1冊

Great Books on University

『彼女のいる背表紙』

堀江敏幸著 マガジンハウス(2009年)

書物の中の人が生身の人間よりも存在感をもって私たちの心のなかの奥深いところに住みついてしまうことがある。若い頃の読書にはこうしたことがしばしば起こるのではないだろうか。時には、そんな「彼」や「彼女」に囚わすも思いを寄せてしまうことだ。あるにちがいない。そんな人に長い時を隔てて再会する体験、すなわちその書物を再読して記憶、あるいは忘却の襞のうちに密やかに隠れていたその人

を呼び出す体験には、初めて読む本がもたらすのとは質の異なる、何ものにもかえがたい期待や気持ちの高まりがあるような気がする。

本書は、あの『郊外へ』や『河岸忘日抄』の著者が、さまざまな書物の中で出会った「彼女」たちとの再会を語る、きわめて魅力的なエッセーである。著者の言によれば、「再読とはいわば時間の層の掘り返しであり、場合によっては、避けて通ってきたものを

見つめ直す、厳しい試練になる」。

こんな得がたい再会を未来において果たすためにも、どんなに稚拙で身勝手な読みであっても、それぞれの年齢や理解度に応じた限界の中で、いろいろな本と精いっぱい向き合っておきたい。もちろん新しい本に出会う楽しみもあるが、大好きな本を何度も読み返すのもとても贅沢なことだ。

本書は、生きている時間の中でいかに書物と付き合うかを指南してくれるすぐれた読書案内であるが、何よりも著者の紹介してくれた「彼女」にすぐにも会いに行きたくなってしまふ効果もそなえている。

(木俣元一)

高等教育研究センタースタッフ(2010年1月現在)

センター長	木俣元一
専門領域	西洋中世美術史
教授	夏目達也
専門領域	高等教育学、技術・職業教育論
准教授	近田政博
専門領域	比較高等教育学、学習支援
准教授	中井俊樹
専門領域	大学教授法、高等教育マネジメント
助教	齋藤芳子
専門領域	科学技術社会論

研究員	久保田祐歌
研究員	安田淳一郎
<平成21年度 海外客員>	
サイド・ベヴァンディ	(パリ第8大学)
孫 準鍾	(韓国教員大学)
<平成21年度 国内客員>	
荒井克弘	(東北大学)
小林信一	(筑波大学)
大場 淳	(広島大学)

名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601 名古屋市中種区不老町

Tel 052-789-5696

Fax 052-789-5695

E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp

URL http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/